
わたしの手紙

二天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしの手紙

【Nコード】

N3872K

【作者名】

二天

【あらすじ】

主人公が自分宛に書いた手紙。

それはあまりにも重い手紙・・・・・・・・

今、私は机に向かっています。^{わたくし}
特に目立った物は何も無い小さな部屋。机だって小さくて痛んでい
ます。

机に向かって何をしているんだい？きつとまだここにあなたがいれ
ばそうやって聞いてくるでしょうね。

私は手紙を書いているのですよ。あて先は私にであり、あなたへの
手紙でもあります。

内容は………これから書いていくのですが、きつとあなたの
ことしか書けないでしょうね。

あなたと過ごした日々を、書いていくのです。

もしこの手紙を書き上げても、あなたには送られません。だってもう
他人なんですから。

だからあなたには送りません。

書き上げた手紙は私自身が読み、納得できればそれでいい。

別にあなたに納得してもらおうとはこれっぽっちも思いませんのよ。
さて、そろそろ本文を書いていきますね。

まず始めに、私にとってあなたという存在はこの世の何よりも大切
な存在でした。

………こうやって書いてしまえば私の気持ちは単純な物にな
ってしまふでしょう。

ならどう書けばいいのか。そんなこと私は知りません。仕方がない
ですね。

だから私はこの足りない文に気持ちを込めます。

私にとってあなたという存在はこの世の何よりも大切な存在でした

「俺はね、お前が好きだ。一番好きなんだ」

あなたのこの言葉が私達の始まりでしたね。あなたにそう言われたとき、私がどんな気持ちだったかあなたは知らないでしょう。

私はあのとき、同じ思いでしたよ。おそらくあなたと同じ思いでした。

心臓はバクバクとすごい勢いで鼓動し、血液は体の中をまるで競争しているかのように速かったのを感じました。

物事も考えられたものじゃありませんでしたよ。なんだか笑えてきます。

「私も好きです」

そう返事をしたとき、思わず涙がこぼれてきたのを覚えています。

まさかあの状況で泣いてしまうとは思いませんでしたよ。

それからあなたは私の泣いている姿を見て思いっきり、ぎゅっと抱きしめてくれましたね。

あなたの心臓の響き、体の温かさがそのまま私に伝わってきて、どんなに心地よかったか。

こんなあなたと私の始まり、周りの人が見たらなんというでしょう。きっと普通すぎてなんとも思わないでしょうね。

私もそうしたいけど、出来ません。どうしても心にこの思い出がなくならないのです。

もちろん無くならない思い出はこれだけではありませんよ。

夏の季節のあの日。私達は海へ行きました。

30度近い気温の中、砂浜は火にあぶられた様に熱くて。それでも海は青くて冷たくて……。

人もたくさんいましたね。中にはあなたに似た人もいたりしました。

「ねえ、海の水ってなんでこんなにしょっぱいの？」

「それはだなあ、なんでだろうなあ」

あなたは本当は知っていたのではないのでしょうか？

まあそんなことはどうでも良かったのです。何よりもあなたと話していたかったから。

私達は水の深いところまで行って、一緒に溺れかけましたね。

「さめだあ」なんてあなたの冗談を真に受けて吃驚して暴れてたら、急に地面に足が着かなくなって……。

それで溺れていた私を見て助けようとしたあなたまでもが同じように溺れて……。

そのときあなたが泳げないことをはじめて知りました。

あの時は本当に恐かったのですよ。

その日以来、二度と海へはいきませんでしたね。言うまでもありません。

秋、付き合い始めて2年が経った日のこと。

あなたの仕事が休みの日、日曜日でした。私達は家に居て、窓の外にあるもみじを眺めていました。

そこはつまり庭なのですが、何もない庭にたった1本だけあるもみじの木。

ただそれだけなのにあなたと私はずっともみじの木を眺めていましたね。

時々紅いもみじの葉が落ちるとお互いに「落ちた!!」と叫んで同時に言ったことに笑い合いました。
幸せでしたね、あの時間が今までの中で一番好きな時間です。
あの日、あなたが採ったもみじの葉。今この手紙を書いている机に飾ってありますのよ。
さすがにあの時のような赤味はないけれどもね。

それからその次の年の冬の季節。

私達の最後の年です。

あの日は晴れていました。快晴でした。

朝起きて、携帯電話を見るとあなたのメール。

内容は「今から行く」

何だろっ、うきうきと支度しているとチャイムがピーンポーン。

あわてて支度を済ませて玄関のドアを開けると、あなたが。しかしいつもより明らかに暗い顔でした。

「中に入らずにここで言う、もう別れよう」

私は一瞬にして寒気を帯びました。いきなり何を言うのかと思いましたが、
「私よ。」

「いきなりなに言うの？まあ中へ入って」

「いや、いい」

「嘘でしょっ?」

「嘘じゃあないわ」

ああ・・・・・・もうこれ以上書きたくなくなってきました。
どうして、どうして急に別れようだなんて・・・・・・
理由はわからない。そんなの今でも聞きたくない。

もうこれ以上書くのは止めにします。

最後に、涙をこの手紙に飾りましょう。

飾らないといったのに・・・・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3872k/>

わたしの手紙

2010年10月29日10時26分発行